

# 20年を振り返って

## —歴代理事長座談会—

「明るい豊かな社会」の実現を理想とするJ.C.では、一人一人が自ら行動し、地域社会の指導者として成長することを目指しています。そのため、メンバーは自分たちで会費を出し合って会を運営し、1年ごとにさまざまな役員を経験しながら、活動を進めています。

内山J.C.はこれまで、平成5年に龍王球場で開いた野外コンサートや板東玉三郎内子座公演をはじめ、プロ選手を招いた子どもスポーツ教室、町政懇話会や公開討論会など数々の催しを企画・運営すると共に、地域行事などにも積極的に参加してきました。

その20年の歩みを、発足当初からのメンバーで第17代理事長を務めた徳田幸治さん(内子10)の進行のもと、初代および第2代理事長・尾花吉光(上町)さん、第10代理事長・小野尚久(昭和)さん、第19代理事長・土居克久さん(西沖)の3人に振り返ってもらいました。



座談会の様子

### 内山J.C.の必要性

▽尾花 合併によって本当のまちづくりというものがはっきりしてきました。そのためには、人材が必要。若者が成長しなくては、町が育っていない。

▽小野 J.C.で築いた人と人とのコミュニケーションが、卒業してからも自分の活動の幅を広げるものとなる。行政や政党に偏ることなく中立的な立場で若者が勉強できる場があるのは良いこと。

▽土居 いろいろなことをJ.C.で



高速道路開通記念の壁画の前で

直って歌をうたった。そんなことが、今も忘れられない思い出。

▼徳田 認承証伝達式とは、内山J.C.が日本青年会議所に承認された書面を受領する儀式。会の誕生日であり、県内のJ.C.にお祝いに来ってもらう宣伝を各地で行っている。

▽小野 高速道路開通記念として、子どもたちの手形で龍の壁画を描いた。町内のすべての小学校児童に参加してもらって実施できたことがうれしかった。

▼徳田 道路開通や三町合併など、その時々の中の動きに応じて活動してきたということ、あらためて実感する。

今後、内山J.C.は地域でどのような存在になっていくべきか

▽尾花 駒の役目を果たす存在

でなければならぬ。起爆剤となり、活気を生む存在であるべき。

▽小野 J.C.は、毎年役員が交代し、卒業や入会などもあってどんどん変わっていく「生きている組織」。同じ事業をやっても、新しい形になっていくのがおもしろい。事業を通じ、リーダーとしての役割を勉強しながら仲間をつくる

学んだ。大きい会社に属したことがない自分にとって、組織を勉強する場にもなった。仲が良いからこそ言ってくれる仲間の言葉が、自分のためになる。

▼徳田 自分にとっては必要な組織だが、地域にとって必要とされる組織となるためには、まだまだ努力が必要だと感じている。

### 20周年を迎えるにあたっての思い

▽小野 10周年のときに理事長を務めたが、脂がのりきった時期でやりやすかった。あれから10年。会員数が減り厳しい情勢の中、守ってきてくれてありがとう。

▽土居 20周年への思いを周りの人々から聞くにつれ、大切にしなければという意識が強くなる。同時に、今こそJ.C.の存在意義が問われていると思う。この20年間に何を刻むことができたのかを検証した上で、将来の展望を切りひらかなければならない。

▽尾花 大洲J.C.で活動を始めて4年目に、仲間から「内子でやりたい」という声が上がった。その声に押され、初代理事長に就任。経験も浅く、何も分からなかったが、情熱と勇気がむしゅらに頑張った。活動を通してJ.C.が必要だという思いが強まり、それを

人々に伝えたいと思って活動を続けてきた。

▼徳田 初代から今につながるやる気と情熱が、ほかに負けない内山J.C.の特徴だと自負している。

### 記憶に残る活動

▽土居 委員長のときに内子座で開いたチェン・ミンのコンサート。やっている最中は自分一人が苦労しているような気がしていたが、終わってみると、いつも仲間を支えられていたのだと気付いた。

▽尾花 思い出はいっぱいある。楽しいこともたくさんあった。

内山J.C.の認承証伝達式の宣伝をする機会が多かったが、一度、途中で頭が真っ白になったことがあった。その後、別の会で再び真っ白になったときには、開き



認承証伝達式の壇上に立つ尾花さん

ことができ、その仲間が卒業してからも財産となる。今は苦しくて、頑張つて新しい事業に挑戦していったほしい。

▽土居 高杉晋作をはじめ多くの人材を輩出した吉田松陰の「松下村塾」のような存在であってほしい。J.C.は、どこからも助成金を受けず、自分たちの会費だけで運営している。だからこそ、どんな意見も言うことができ、政治的・経済的に多くのリーダーを生みだしてきた。多様な人材との交流を通じて、人間として成長できる。

### 後輩や地域の若者へ、メッセージ

▽土居 J.C.の目的は、明るく豊かな社会を実現すること。事業はそのための手段にすぎない。そして最大の目的は人材の育成である。20〜30代の未熟な時期に仲間

と共に切磋琢磨し、そこで培った経験を、卒業してからも社会に還元していったほしい。

▽小野 J.C.を通じて、世界でボランティア活動に参加した。チャンスがあれば積極的に世界に出て人々と交流し、見聞を広めてほしい。そこからまた、ふるさとの良いところが再発見できると思う。

▽尾花 現代の若者の中には、精神年齢の成長が途中で止まっているように感じられる人が多い。生涯学習という言葉があるが、例えばPTAでは、親が親になるために勉強している。同様に、若者が大人として成長していくために、J.C.などの場でしっかり勉強していく必要があるのではないだろうか。それが将来、日本の国力の向上にもつながると思う。



●尾花 吉光さん  
(初代・第2代 理事長)



●小野 尚久さん  
(第10代理事長)



●土居 克久さん  
(第19代理事長、現・愛媛ブロック協議会会長)



「進行」徳田 幸治さん  
(第17代理事長、20周年実行委員長)